

レイバーノーツ2001年大会と チームスターズ民主化同盟

五十嵐 仁

はじめに	第3日目 (interesting meeting)
大会の日程と概要	第3日目 (ワークショップ3)
第1日目	映画『パンとバラ』
第2日目 (午前)	チームスターズ民主化同盟への訪問
第2日目 (午後)	

はじめに

私は、4月20日から22日まで、デトロイトで開かれた第11回レイバーノーツ (Labor Notes) 隔年大会 (2001年大会) に参加しました。本稿は、この2年に一回開かれる大会の参加・傍聴記です。

レイバーノーツというのは、アメリカ労働運動の民主的改革と再活性化を目指す労働組合活動家の集団で、『レイバーノーツ』という月刊誌を出しています。ウェブ・サイトもありますので、詳しくはウェブ・サイト<http://www.labornotes.org>をご覧ください。

今年の大会は、「労働は世界を変えることができるのか? (Can Labor Change the World?)」をスローガンに、アメリカやカナダ、メキシコなどから約900人のメンバーを集めて開かれました。



レイバーノーツ大会の会場：コボ・コンファランスセンター

大会の会場は、デトロイト川に面したコボ・コンファランスセンターです。昨年の暮れにここを訪れたときは白い雪に覆われており、川面に流れる氷が日に当たってキラキラ輝いていました。しかし、この時には雪も氷もすっかり溶けており、春の柔らかい光に包まれていました。

大会期間中、日本人らしき人とは一人も会いませんでした。日本からの参加者は私だけだったようです。

大会の日程と概要

大会は3日間にわたって開かれました。1日目は午後から、女性やUAW関連の問題別分科会などが開かれていましたが、全参加者を対象としたものではありません。全員を対象とした全体集会は午後7時からで、最終の全体集会は3日目の午後2時30分に終わりました。実質的には2日間の日程だったといつて良いでしょう。

大会の中心は2日目で、朝から夜遅くまでスケジュールが組まれています。朝は8時半から10時まで全体集会があり、10時10分から12時まで労働組合別・分野別分科会が開かれました。12時から2時までは昼食時間でしたが、12時15分からは反FTAAのデモが予定されていたから、このデモに参加する人にとっては食事時間は実際には15分しかありません。

2日目の午後は、2時15分から3時45分まで「ワークショップ1」、3時50分から5時15分まで「ワークショップ2」と、2つの分科会が持たれました。その後、5時20分から7時20分まで映画『パンとバラ』の上映会、5時30分から7時30分まで有色人種コーカスが並行して開かれました。8時から10時までには夕食会と催し物があり、10時から午前1時までがパーティーです。

3日目も8時半からの開始です。9時半までの1時間、関心別分科会（interesting meeting）が開かれました。9時45分から11時15分まで「ワークショップ3」があり、並行してラテン系労働者の会議が開かれました。11時20分から1時20分まで映画『パンとバラ』の上映会があり、これに並行して11時30分から1時20分まで女性コーカスと男性労働者の会議が開かれました。

この日は特に昼食時間が設けられていませんでした。時間を見つけて各自で摂るというやり方ようです。その後、1時半から2時半まで最後の全体集会が開かれ、これで大会の全日程が終了ということになります。

以下、この日程にそって、私の見聞を中心に大会の内容を紹介することにしましょう。

第1日目

こちらの会議は、通常、登録の受付から始まります。大抵、ウェブサイトに会議の通知や概要が発表され、そこには参加登録（Registration）の欄があり、一定の期日までに申し込むこととなります。すると関連書類が送られてきて、登録の完了となるわけです。

Registrationは、会議のはじまりにも必要で、そこで名札やプログラムなど会議関係の書類をもらいます。今回のレイバーノーツの大会も例外ではありません。コボ・コンファランスセンターの2階で受付を済ませました。

この受付の向かい側の部屋が、各種団体の書籍や資料などの展示・即売場です。その片隅にテーブルと机が置かれ、休憩所になっています。朝になるとここに簡単な食べ物と飲み物が置かれ、朝食を摂ることができました。

この展示・即売場で、私もレイバーノーツが販売していた『The Transformation of U.S. Unions』、『Democracy is Power』という本を購入しました。また、チームスターズ民主化同盟（teamstars for Democratic Union, TDU）も「店」を出していて、そこで『Rank-and-File Rebellion』という本を買いました。

ぶらぶらしながら眺めていますと、「YOUNGSTOWN」という文字が目に入りました。私が5月に訪問することになっていたYoungstown State Universityのある町の名前です。近寄って行って話をし、「アメリカの労働運動について勉強している」と言いましたら、一冊の本を薦められました。『The New Rank and File』という本です。横にいるのが編者の一人だということで、Staughton Lyndという方からサインをしていただきました。

そうこうしているうちに、間もなく、開会式と全体集会の始まりです。最初の歓迎の挨拶はアメリカ大学協会のCharls Simmons 東ミシガン大学教授で、デトロイト地域の環境保護運動にも取り組んでいる方です。この後、韓国の大宇自動車でストライキを行っている韓国民主労組の代表の挨拶があるようにプログラムには書かれていましたが、実際には行われませんでした。

この後、「新しい脈絡の下で変化する労働組合」というテーマの下に、ILWUローカル5の副委員長、電機労働者の代表など3人の演説がありました。その中でも注目されたのは、チームスターズ(自動車運転手組合)のローカル206の委員長であるトム・リーダム(Tom Leedham)です。今年11月のチームスターズの会長選挙に立候補を予定しており、前回に続いて、ジミー・ホッフア・ジュニア現会長に対する2度目の挑戦ということになります。

特にこの演説の中では、シアトルでのWTO閣僚会議に対する取り組みを高く評価し、労働組合と環境保護運動など市民団体との連携を強調していた点が印象的でした。もっとも、「チームスターズとミドリガメの同盟」(WTOシアトル会議でのスローガン)と言われたように、この運動の労働組合側の中心になったのはチームスターズでしたから、彼がそれを高く評価するのは当然でしょうが……。

全体集会の後、インターナショナル・レセプションがあるという案内がありました。日本からの参加者がいるかもしれないと思って、顔を出してみましたが、日本人らしい人には、全く出会いません。ハーバード労働組合プログラム(HTUP)に参加した人でもないかと思って探しましたが、誰にも会いません。結局、この大会では一人の知り合いにも出会わず、全く未知の人たちばかりという状況でした。

レセプション・ルームに行ってみますと、テーブルと椅子があり、飲み物は実費です。おつまみのようなものは、何もありません。例によって、挨拶もなければ紹介もなし。ただ、てんでに飲み物を買って、テーブルに座って談笑しているだけです。

これがどうしてインターナショナルなのかというと、カナダやメキシコなど、アメリカの「インターナショナル組合」からの参加者がいるからでしょう。メキシコからの参加者がかなりいるようで、時々スペイン語らしい言葉が聞こえてきます。

これでは、長居は無用です。知り合いも居ませんので、ビールを一杯飲んで早々に引き上げました。といっても、このレセプションの始まりが9時ですから、ホテルに帰ってきたのは10時過ぎで、ベッドに入ったのは12時を過ぎていました。

第2日目(午前)

朝8時半から全体会議が始まることになっていますので、簡単に食事を済ませてホテルを出ました。今にも降り出しそうな曇り空の中、ピープル・ムーヴァーと呼ばれているデトロイト名物のモ

ノレールに乗りました。運転手も車掌もいず、完全な自動運転です。東京の多摩で走っているモノレールに良く似ています。会場のコボ・コンファランスセンターまで二駅しかありませんので、5分もかからずに到着です。

全体会議の開かれる会場に入りましたが、まだ誰も来ていません。予定の8時半を20分ほど過ぎてから、ようやく開始です。最初に、地元デトロイトの新聞社のスト参加者から歓迎の挨拶があり、次に、ベライゾン・ストライキ、マサチューセッツ看護婦組合のスト、運輸労組や造船労組の運動の経験など、4人の報告者から発言がありました。

この全体集会は8時半から10時までで、その後、労働組合ごとの分科会に分かれます。航空、建築、看護婦、郵便、公務、鉄鋼、通信、自動車、大学のほか、カジノ労働者やアムネスティの分科会もあります。私は、チームスターズの分科会に出ました。他に適当なところがなかったということと、ある予感があったからです。

その予感が的中しました。一番後ろの席に座っていましたが、突然、背後から声をかけられました。チームスターズ民主化同盟のスタッフだといえます。自己紹介をして、私が「事務所を訪ねたい」とあらかじめEメールを送った相手だということが分かりました。返事がなかったのではほとんど諦めていましたが、これでTDU本部の訪問が実現することになります。

分科会の初めに、順繰りに参加者の自己紹介がありました。私も立ち上がり、「ジン・イガラシ。客員研究員です。日本から来ました。アメリカの労働運動について勉強しています。とりわけ、チームスターズについて」と自己紹介しました。

最後の所は、「リップ・サービス」でしたが、沢山の拍手をいただきました。セッションが終わってから、これを聞いていた参加者の一人が、「日本から来たのか」と声をかけ、TDUのオフィスを訪問したかと聞き「スタッフを紹介してあげよう」と言います。私がもうコンタクトを取ったと行って先ほど会ったスタッフの名前を挙げましたら、「それはいい」と言って立ち去って行きました。

この分科会の内容は、チームスターズのローカルの活動報告や経験交流などです。参加者は60人ほどいましたが、次々と前に出て報告します。チームスターズというのは、元々は駅馬車などの御者の組合で、「チーム」というのは組になっている馬です。その馬を御するから「チームスターズ」というわけです。この分科会には、昨日の全体集会で記念講演を行ったトム・リーダムも出席していて、会長選挙に向けてのキャンペーンについて報告し、決意表明のような挨拶をしました。

この報告があったためか、後半の質疑応答では、会長選挙にどう取り組むか、どう効果的なキャンペーンを展開するかということが主な内容になりました。対話や討論の重要性、Eメールなど新しい情報伝達手段の活用、女性や若者への訴えの重要性などが強調されていたのが印象的でした。

第2日目（午後）

分科会が終わりますと昼食です。用意された弁当（ランチ・ボックス）を買いました。10ドルですが、半分はカンパのようなものです。中は、ハムとチーズのサンドイッチ、生のニンジン、リンゴ、スナック菓子などです。これに炭酸飲料が付きます。

お昼休みは12時から2時までありますが、12時15分には「Anti-FTAA Demonstration」が出発す

ることになっています。ランチ・ボックスでそそくさとお昼を済ませ、出発の場所まで行きましたら、もう出た後でした。慌てて後を追いかけてました。あるホテルの前の集会で追いつきました。誰かが演説しています。

その後、再び、デモ行進を始めました。アメリカのデモ行進の実物を見るのは初めてです。デモは、車道ではなく、歩道を歩いていました。マイクでスローガンを叫び、バケツを逆さまにして底を太鼓のように叩いています。地元のテレビ局らしきレポーターが参加者にインタビューしています。それなりに注目を集めたのでしょう。会場のコボ・コンファランスセンター前には、騎馬警官も出動していました。

午後のワークショップは、「ワークショップ1」が2時15分から3時45分までで、「ワークショップ2」が3時50分から5時15分までと二つ続きました。それぞれ、25テーマ、23テーマに分かれて報告を聞いたり討論したりします。報告が主であるものと、椅子を丸く並べて討論主体に行うものがあるようです。

私が出たのは、ワークショップ1では「Bargaining to Organize」と「Connecting for Rank and File Power - Web sites and Internet」の二つ、ワークショップ2でも「New Labor Politics」と「New Alliance」の二つです。計4つをかけ持ちで出たわけです。こうしたのは、興味のあるテーマが重なっていたということもありますが、それぞれのテーマにどれくらいの参加者がいるかということにも興味があったからです。

参加者の数は、活動的組合員の関心の強弱を反映しています。レイバーノーツの参加者がどのようなテーマに興味を持っているのか、その参加状況で判断しようというわけです。この4つのなかで最も参加者が多かったのは、労働組合と社会運動団体との連携をテーマにした「New Alliance」で、私が覗いたときには34人出席していました。このテーマは、社会運動的労働運動の展開という新しい方向とも関わって、参加者の関心を集めたのでしょう。

2番目に多かったのは、労働組合と政党・政治活動との関わりという私の研究テーマに直結する「New Labor Politics」で、約30人です。「この中で、労働党の党員はどれくらいいますか」と聞かれたら、参加者のほとんどが手を挙げました。労働組合を基盤にする政党の結成はアメリカ労働運動の悲願ですが、これまでほとんど成功していません。レイバーノーツが関係する政党には労働党と緑の党がありますが、この二つの政党とも全国レベルの政党としては極めて弱体です。

このワークショップでの報告も、フロリダとデトロイトの活動の経験ということで、地方的なレベルにとどまっていた。もう一人は、アメリカではなくカナダからの報告者です。このような報告のあり方は、アメリカにおける「労働政治」の現状を反映しているように思われます。つまり、アメリカではまだ全国レベルで取り上げるべき実績はあまりなく、カナダの経験に学ぶ段階だということになります。

3番目に数が多かったワークショップは、ウェブ・サイトとインターネットに関するもので、25人ほどでした。参加者の数からして、関心が高いのか低いのか、判断に迷うところです。しかし、このようなワークショップが設けられているというところに、時代状況が写し出されているように思われます。ここでは、講師が一方向的に講義をしていたようで、私が入った終わりの方の時間でも、まだ話は終わっていませんでした。労働組合のウェブ・サイトの内容はどうか、組合員の

意見交換の場としてどう活用するかというような話だったようです。

最も参加者が少なかったのは、組合員組織化のための交渉をテーマにしたワークショップで、20人ちょっとでした。ここは椅子を丸く並べて討論主体で運営されていました。最初は10人もいなかったのですが、段々と増えて20人を越えました。私は、スウィニー執行部の新方針にもかかわらず、組織化がなかなか顕著な成果を上げない原因を知りたいと思ってここに参加したのですが、討論の中身は、主として組合結成にあたっての経営者との対応に絞られていました。どう、経営者を中立化させるか、中立化協約をどう結ぶか、組合に有利な署名での投票をどう勝ち取るかなどが、経験を交えて話されていました。

8時からの夕食会では、顔つきの良く似た兄弟と同席しました。お兄さんが自動車労働者で弟さんがクリーブランドに住むUSWA（全米鉄鋼労組）の組合員です。クリーブランドには昨年末に訪れたことがありましたので、話が弾みました。このテーブルには、お兄さんの友人だというドイツからの自動車労働者が3人、ブラジルから1人のゲストも一緒です。ドイツからのゲストの一人はダイムラークライスラーの労働者で、シュツツガルトに住んでいます。ここにはÖTV（エー・テー・ファウ）というドイツ公務労組の本部があり、私も昔、調査で行ったことがあります。

夕食会のメイン・ディッシュは鳥の半身を丸焼きにしたもので、ボリュームも味もなかなかでした。しかし、このようなものをナイフとフォークで食べるのは大変難儀です。日本人はナイフとフォークを使うのに慣れていないと言い訳をして手を使いましたが、ヒョイと横を見ますと、隣にいた方も手を使って食べていました。

彼の息子さんが大学で日本語を勉強しているとかで、色々と話しました。丁度良い機会でしたので、結局は挫折した鉄鋼・自動車・機械の三大労組の合併問題についての意見を聞きました。彼の意見は、合併して民主的な組合ができるなら良いが、非民主的な巨大組合ができるよりは、バラバラの方がまだましだということです。彼も、合併にはあまり積極的ではなかったようです。

この後は、10時から午前1時（!!）まで「Party!!!」と、プログラムには書いてあります。本当にやったんでしょうか、1時まで……。知り合いがほとんどいない私は早めに引きあげましたので、その辺は確認しておりません。

第3日目（interesting meeting）

朝、起きてしばらくしたら、日が出てきました。天気の良いれば、歩くに越したことはありません。会場のコボ・コンファランスセンターは、思っていたよりもずっと近くです。ピープル・ムーバーを待っているよりも早いくらいです。直ぐに着いてしまいました。

最初の分科会は、労働党と緑の党に関するものです。部屋が隣り合っていたので、両方覗くつもりでした。部屋に入って、ビックリしました。昨日の夕食会で隣り合わせた兄弟の一人が居たからです。彼は労働党員だったんですね。

この後、隣の部屋を覗いてみて、またビックリしました。緑の党の討論会の司会をしていたのは、昨日会った兄弟のうちUAW（全米自動車労組）の組合員であるお兄さんの方だったからです。兄弟で別の党の分科会に出ていたわけです。この二つの党は「兄弟党」のようなものですから、こういうこともあるのでしょう。

参加者の数は、緑の党よりも労働党の方が多くなっていました。しかし、これはレイバーノーツの中でということですから、実際にはどちらの組織が大きく、影響力が強いのかは良く分かりません。少なくとも、大統領選挙でラルフ・ネーダーを候補に立てることができた分だけ、緑の党の方が大きな影響力があるようです。

また、日本など海外での知名度も、緑の党の方が圧倒的に高いでしょう。労働党は、1996年にいくつかの労働組合を基盤に結成されましたが、よほどの人でなければ、アメリカにも労働党があるということをご存知ないのではないのでしょうか。

この労働党についての討論会の最初に、ラルフ・ネーダーをどう評価するかと、司会者が問題を提起しました。緑の党との関係をどう考えるかという問題でもあります。これについては、「一緒にやったらいいんじゃないか」という意見が大半です。「彼らも隣の部屋で討論しているんだから、“Open the Door” というのは良い考えだ」という発言もありました。

両方の党に入っているという人もいるようで、討論の後半では緑の党からの代表がやってきて討論に加わりました。先ほどの兄弟の例もあり、両党の近さをうかがうことができます。確かに、二つの党の集会が同じレイバーノーツの分科会になっているわけですから、別々に分かれている必然性はあまりないといえます。近い将来、一緒になる可能性もあると思われませんが、問題はラルフ・ネーダーの態度でしょう。

この分科会が終わってから、一人の方に呼び止められました。最初の私の自己紹介を聞いていたようです。ボストンにも労働党の組織があると言います。この方もマサチューセッツ州から来られた大学教員で、名刺をいただきました。

第3日目（ワークショップ3）

この後、すぐに「ワークショップ3」に出ました。「Attention Organizers: Potentials and Pitfalls」というテーマです。ここも円形になっての討論会で、参加者の大半はプロの労働組合オルガナイザーのようです。ここでも最初に自己紹介をしましたが、「私はオルガナイザーではなく、ビジティング・スカラーです」と自己紹介しました。

討論の最初に、司会者が「何故、オルガナイザーを目指したのか、2人一組になって自分史を話してください」と、問題を提起しました。「これは困ったことになった」。オルガナイザーではない私は、一瞬、こう思いました。

その時、右側の若い女性からつかれました。私が相手だというわけです。やむを得ません。何故、私がこの分科会に来たのか、何に関心があるのかについて話しました。そして、彼女が何故、オルガナイザーになったのかを聞いたわけです。まだうら若い女性が、何故、どのようにして労働組合のプロのオルグになったのでしょうか？

彼女は、大学時代に人種差別や性差別などの社会問題をきっかけに「社会正義（social justice）」に目覚め、学生を対象にした「ユニオン・サマー（これについては、拙稿「現地でみたアメリカ労働運動 - 体験的レポート」『経済』5月号で簡単に紹介しています）」に参加し、卒業後、AFL・CIOの主催するオルグ養成コースを経て、オルグになったと言います。このオルグ養成コースはテキサスで受講し、1日、3日、3カ月の3つの段階に分かれている全てのコースを卒業したのは彼

女ともう一人だけだったそうです。

その後、プロのオルグとしてカリフォルニア大学に派遣され、今は主として大学の教職員を対象にオルグ活動を行っています。「給与はどうなっているのか」と聞きましたら、AFSCME（アメリカ地方公務員組合）のオルグなのでそこから出ている、と言います。「知っています。アメリカ最大（正確に言えば、AFL・CIO傘下で最大）の組合ですね」と言いましたら、嬉しそうに微笑みました。オルグとしてのキャリアは、まだ2年だそうです。

この分科会に出たのは大きな収穫でした。この他にも、興味深い話を聞くことができたからです。また、討論の中身も面白く、他の分科会をかけ持ちする気がなくなり、最後まで皆さんの話を聞きました。しかし、何よりも強く印象付けられたのは、プロのオルグを中心とするこの分科会の参加者の構成です。参加者は30人以上に上り、女性が約半分。年齢の判断は困難ですが、20～30代が半数以上でしょう。

皆さん、若々しく、活気に満ちているという印象です。司会者も女性で、私の相手になって話した方も、まだ20代前半の女性です。これらの若者は大学時代に社会問題に目覚め、大学を出てから専門の養成講座を受講し、そのままオルグとして活動しているようです。この辺が、日本とはかなり違っているのではないのでしょうか。

もう一つ印象的だったのは、彼らの発言にしばしば「justice」という言葉が出てきたことです。この言葉は、彼らだけでなくレイバーノーツの活動を貫く理念であり、それはアメリカ労働運動の旗印の一つになっているようです。たとえば、今回の大会プログラムの最後に「謝辞」が載っています。そこには「信念を持ってレイバーノーツの活動に参加されていることに感謝します。あなたの職場で、地域で、私たちの世界で、労働に基礎を置いた（labor-based）社会正義のための運動の確立に力を尽くされていることに感謝します」と書いてあります。

「justice」というのは、日本語で言えば「正義」ということになりませんが、それ以外にも、公正や正当性、当然の処遇などを含むものとして用いられているようです。「不正をただし、社会正義のために闘う」。それが、彼らにとっての労働運動なのです。

このような社会正義に目覚め、そのために人生をかけようとする青年は、おそらく日本でも少なくないことでしょう。社会的に意味があり有用な活動に人生を捧げたいと考える若者も、アメリカより少ないとは思えません。しかし、これらの青年は労働運動には目を向けず、NPOやNGOなど他の社会的運動に身を投ずる場合が多いようです。あるいは、理想や正義感を生かせる場を見いだせず、現実の生活に妥協し、呑み込まれていく場合も多いでしょう。

日本の若者に意欲がないわけではない。その意欲を生かせるような場を、効果的に提供できていないだけなのではないか。この日の分科会での討論を聞いて、このような感想を持ちました。これは、これからも考えていかなければならない大きな論点であるように思われます。

映画『パンとバラ』

この後、「映画」を見ました。大きなスクリーンで見るとかと思ったら、テレビのビデオです。小さな部屋が、「観客」で一杯です。『Bread and Roses』というメキシコ移民のビル清掃組合結成などの活動を描いた映画です。舞台は、ロサンゼルスだそうです。

この映画の上映に先立って、モデルとなった組合の幹部が映画の背景説明を行いました。彼女はスペイン語で話をし、横で通訳が英語に訳しています。彼女の着ているTシャツには、「JUSTICE FOR JANITORS」と書いてあります。このTシャツは、映画に出てくる組合のオルグが着ていたものです。

ここにも「JUSTICE」が出てきています。また、「JANITORS」というのは、本来はビル管理人を意味していましたが、今ではビルの清掃などに従事する労働者を指しています。このようなビル清掃の仕事には、メキシコからのラテン系労働者が沢山雇用されています。今回の大会でも、スペイン語が飛び交い、時々英語の通訳が付くという場面が何回かありました。

この映画は、騙されてメキシコから不正入国してきたヒロインが、ビルの清掃労働者になり、偶然知り合ったオルグの指導で組合を結成し、デモなどに参加して警察につかまり、不正入国がばれて強制送還になるまでが描かれています。まあ、こう言ってしまえば、実も蓋もありませんが、なかなか面白かったです。映画の中身も、それに対する「観衆」の反応の方も……。

皆さん身につまされるのか、組合オルグと会社役員とのやりとりや集会、デモなどの場面では敏感に反応されます。日常的に体験していることですから、当然かもしれませんが……。メキシコ人同士のスペイン語の会話には、英語の字幕が付きます。それでかなりストーリーが分かりました。字幕無しのせりふだけでは、まだまだ付いていくのが大変です。

なお、表題の『パンとバラ』は、映画の中で、オルグが「我々はパンだけでなく、バラも要求する」と演説するところから来ています。ただ生きられればそれで良い、というだけでなく、人間的な生活を求めるということでしょうか。「最低限度の生活」だけでなく「文化的な生活」でなければならない、ということになります。ここに、日本国憲法の生存権規定に通ずる主張を感じ取ったのは、私の「深読み」だったでしょうか。

チームスターズ民主化同盟への訪問

ホテルのチェックアウトを済ませ、デトロイト・メトロ空港に行く途中、チームスターズ民主化同盟(TDU)の本部を訪問しました。この本部は、デトロイトのダウンタウンではなく、その郊外を空港寄りに20分ほど車で走ったところにあります。



TDUとレイバーノーツの事務所

ホテルをチェック・アウトするとき、クレジットカードが使えないというトラブルがあったりして思いの外時間がかかってしまいました。外に出て、やって来たタクシーに飛び乗り、何とか約束の時間を5分ほど遅れただけで到着しました。でも、ドアを開けようとしたら開きません。中からカギがかかっています。

「まだ、誰も来ていないのかな」と思って、事務所の写真を撮ったりしな

から、待ちました。しばらくして、人がやってきましたので、その人について中に入りましたら、もう何人が来ていました。自動的にカギのかかるドアだったようです。

中にはいると直ぐに受付があります。デスクがあって、女性の方が座っていました。その奥が事務室で、いくつかの部屋に分かれています。私を中に入れてくれた方をお願いして、約束してあったスタッフの方を呼びだしていただきました。

このTDUの事務所は2階建てのビルの中にあり、レイバーノーツの事務所と同居しています。住所は、一方が7437番地、他方が7435番地ですが、この両方の家を取り壊されて一つのビルになったのでしょうか。入り口の扉の上には、この両方の数字が書いてありました。

ここには地下室もあり、地下と1階、2階の一部をTDUが使い、2階のその他の部分をレイバーノーツが使っているのだそうです。レイバーノーツの事務所も覗いてみたいと言いましたら、「今日は休みで、誰もいない。大会が終わったんで、みんなバカンスに行っちゃったよ」と言います。休みだというのでは、やむを得ません。

地下室のオフィスで、スタッフの方から話を聞かせていただくことにしました。この本部には、スタッフが7人いるそうです。ニューヨークにも事務所があって、2人のスタッフが駐在していると言います。

TDUは、アメリカ全体で約1万人のメンバーを持っているそうで、ここ5年間ほどは増減なしだと言います。現在取り組んでいる重点課題は二つあって、一つは会長選挙への取り組みだそうです。先にも書きましたように、この秋にはチームスターズの会長選挙がありますので、TDUの活動の最重点は、この選挙でのリーダム候補の当選に置かれています。事務所の前の電柱には、リーダム候補のステッカーが貼られており、事務所の机の上にも沢山のリーフレットが置かれていました。

実はこの後、デトロイト空港で、そのリーダム候補にばったり出会いました。搭乗カウンターで手続きを済ませ、搭乗口に向かうその途中のことです。目の前を、見たことのある人が横切っていくではありませんか。「トム・リーダム」。思わず声をかけました。

怪訝な顔をして振り返ったリーダムさんに向かって、「お会いできて嬉しいです」と言いましたら、向こうも察して「レイバーノーツの大会に出たのですか？」と聞いてきました。「そうです。大会で、あなたの話を聞きました。チームスターズの会合にも出ました。」こう言って、名刺を渡して自己紹介させていただきました。彼は、名刺を持っていなかったようで、Eメールアドレスを教えてくださいました。

このリーダム候補を前面に押し立てての選挙の見通しについて聞きました。当然ながら、勝敗については分からないと言いましたが、十分に勝算はあるという意見です。前回の選挙でもリーダム候補はかなりの得票をしていますから、それも当然でしょう。秋の選挙が目玉されます。

もう一つの重点課題は、会員の教育プログラムの充実で、各種のセミナーや講習会などを開いているそうです。年一回開かれる大会はこの教育プログラムの中心になっていて、全国から400人ほどが出席するといえます。

この他の活動としては、メンバーを増やすこと、役員選挙などでメンバーを進出させること、チームスターズの方針を転換させることなどが主な仕事になっているそうです。最近もシアトルのローカルの役員選挙でTDUの推す候補が当選したと話していました。

チームスターズの体質の改善という点では、会長を変えることも大切だが、それと同時にその背後にいるローカル・レベルの地方ボスを一掃していくことが重要だと言っていました。彼らは、その地方の有力者やマフィアなどとも結びついており、経営者と協調しながら私腹を肥やしているというのが、彼の主張です。

この他、TDUについてだけでなく、バリーさん個人についての話もうかがいました。彼も、先に会った女性のオルガナイザーと同様に、学生の時に労働運動に関わる活動家（student labor activist）になり、1996年から始まった「ユニオン・サマー」の最初のプログラムに参加したそうです。

その後、AFL・CIOのオルガナイザーとしての講習を受け、TDUのスタッフになる前はSEIUに雇用されていました。この点も先の女性と良く似ていますが、彼の場合は短期間、コンクリート工場に勤めていたそうで、労働経験が多少あるという点が違ってきます。

1時間ほど話をうかがって、空港に向かうことにしました。彼は電話でタクシーを呼び、私の荷物を持って外まで見送ってくれました。彼も、オルグの期間を含めたキャリアは3年半くらいのもので、まだ若い活動家です。このような学生出身の若い活動家が育っているところに、アメリカ労働運動の可能性の一つをうかがうことができます。願わくば、彼らの努力が報われるべく、はっきりとした結果となって現れてきて欲しいものです。

（いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所教授）

<p>復刻内容</p> <p>経済復興会議 (1～3巻, 2000年6月) 産業復興会議, 地方別復興会議 (4・5巻, 2000年8月) 業種別復興会議, 企業別復興会議 (6・7巻, 2000年10月) 労働組合 (8・9巻, 2000年12月) 政党・経済団体 (10巻, 2001年1月)</p>	<p>編集 中北浩爾（大阪市立大） 吉田健二（法政大学大原社研） 編集協力 法政大学大原社会問題研究所</p> <p>片山社会党首班内閣を経済安定本部とともに支えた経済復興会議をはじめ、各種復興会議・労働組合・経済団体・政党などの資料を集大成し、経済復興運動の全容を初めて明らかにする。</p>	<p>片山・芦田内閣期 経済復興運動資料</p> <p>全10巻</p>	<p>復刻期間</p> <p>第1巻1号（大正12年8月）から第3巻8号（昭和11年8月）まで</p> <p>第1回（2000年5月） ①巻②巻③巻 第2回（2000年7月） ④巻⑤巻⑥巻 第3回（2000年9月） ⑦巻⑧巻 第4回（2000年11月） ⑨巻⑩巻 第5回（2001年1月） ⑪巻⑫巻</p> <p>菊判上製 各巻平均600頁 定価各巻20,000円</p>	<p>推薦</p> <p>大内 力 大谷禎之介</p> <p>社会問題、労働問題、農民問題の研究者が依拠すべき資料 戦前の研究活動の多面的な再検討を期待する</p>	<p>★研究所創立八十周年・法政大学合併五十周年記念出版</p> <p>大原社会問題研究所雑誌</p> <p>全12巻</p>
<p>B5判上製 各巻平均500頁 各巻25,000円</p>			<p>菊判上製 各巻平均600頁 定価各巻20,000円</p>		<p>◎価格は税抜</p>
<p>日本経済評論社</p>			<p>〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-2 TEL 03(3230)1661 FAX 03(3265)2993 http://www.nikkeihyo.co.jp</p>		<p>◎価格は税抜</p>